

日本木材学会抽出成分利用研究会は、研究会活動の更なる活性化に向けた初の試みとして、東北森林科学会と共催で合同企画「樹木抽出成分討論会（シンポジウム）」を平成 30 年 9 月 3 日午後、秋田市民交流プラザ ALVE にて開催した。

まず、東京大学名誉教授谷田貝光克先生より「快適環境づくりに香り・抽出成分—その研究の現状と未来—(基調講演 1)」ならびに山形大学教授高橋孝悦先生より「目で見えるスギの木—葉の分析—(基調講演 2)」と題して 2 件の基調講演をいただいた。基調講演 1 では主としてテルペノイドの生理活性や利用等について紹介がなされ、とりわけ「リード化合物」として天然物の将来的可能性を強調される内容は興味深いものであった。基調講演 2 では葉中テルペノイド組成によるスギ分類研究の歴史について紹介がなされ、これを受けて、近年の機器の発達を以てしても葉成分分析の困難さがあらためて確認された内容は興味深いものであった。

続いて、ニセアカシア心材形成に関する組織化学的解析、シナアブラギリ種子油の利用・成分分析、トドマツ球果成分のクローン間差、葉中テルペン組成によるスギの分類、フェルギノールの抗酸化機構の解析、に関する 5 件の口頭発表がなされた。

その後、フェルギノールの抗アルツハイマー病作用、スギ樹皮試料粒度が成分定量に及ぼす影響、オオバクロモジヘキササン抽出物の成分分析と抗蟻活性、トドマツ樹脂の成分分析と生理活性、カキノキ心材形成に関するモデル的組織細胞解析、DART (Direct Analysis in Real Time)-MS の樹種同定への応用、に関する 6 件のポスター発表がなされた。

本討論会参加者数は 28 名であり、樹木抽出成分について基礎から応用までの幅広い知見を共有し、より深く探究することができた。

(文責 抽出成分利用研究会代表幹事 名古屋大学 今井貴規)